

# 「もう彼ら困難直面」

## マスクで見えぬ口元、表情



パソコンのテレビ会議アプリによる取材に、手話で答える  
吉田麻莉さん(左上)ら3人の当事者と、手話通訳者(右下)

## 意思疎通できず、諦めも

賢い鳥の代表格がコウム。数や色といった抽象的概念を理解できるそうです。そんなコウムが人助けすることを示す実験が、スイス連邦工科・エチヨーリッヒ校のデジレ・

を使って人間からエサをもらうための窓を開けます。そしてエサをもらえない右の部屋のコウムにだけリングを渡します。すると右のコウムはすぐに、もらつたリングを壁の

「対策要望せず」78% 備蓄者職場調査

障害のある人に、勤務先の新型コロナウイルス対策などを尋ねた民間調査で、障害者が自身の要望を雇側に伝える実情が分かった。雇用している企業・団体は、個々の事情に積極的に対応する姿勢が必要といえそうだ。

調査は2月下旬～3月上旬にネット上で実施。障害者163人が回答した。新型コロナウイルスに関する「要望してない」とかを尋ねたところ、「要望した」は13%にとどまつた。具体的な要望では、免疫抑制剤を使用している難病の人が在宅勤務を求めるなど、切実な声が多い。人工透析中の腎臓病の人が、せきを求める一方で、聴覚障害を会社側に伝えたい人が希望する対策をマスク着用の徹底のために朝礼や会議の重複を尋ねたところ、「要望していない」は78%にも上り、78%と助言した。

調査を行ったのは、障害者の就労支援を行う人材紹介会社「ゼネラルパートナーズ」(東京都中央区)で、担当者は「何が困って意見を出している?」と誘い水を向けてもらうだけ。「障害がある人が希望する側に要望。」「やさしくなる」と雇用側に要望。会社に貢献するための『調整』と捉えれば、客観的、合理的に説明できるはず」と助言した。

いきものたちの  
りくつ

ノードを、ぜひご  
(松村和彦)  
事集中です。自薦姿  
ません。マスク姿  
としてshot@mb  
ード②名前(ニッ  
たいの市町村一

新型コロナウイルスが猛威を振るう中、耳が聞こえないうる者や難聴者らが困難に直面している。誰もがマスクを着けているために日常生活で意思疎通が難しくなり、長引く休校で子どもたちは手話の機会が減つて孤立するケースも。当事者の思いや対策を聞いた。

「マスクをされると、口元の動きや表情が分からなくなる。かと言つて、外してくださいとも言えないのです」。横浜市の中学生三原毅さん(55)は苦しい現状を訴える。

三原さんは生まれつきの、ろう者。店で買い物をする際、耳を指して手を振り、事情を伝えようとするが、意味が分からず困ってしまう。店員もいるといふ。「結局、意思疎通ができます、面倒になって適当にやり過ぎることもあります」

聴覚障害の多くの人は、相手

の口元や表情を読んで対話するが、マスクはその妨げになる。手話でも、口の形や動きは重要な要素だといふ。最近の各地の知事会見などで、手話通訳者があえてマスクをしていかつたりするのはそのためだ。

川尻真木子の公務員吉田麻利さん(33)は「以前から日本社会にある問題点が今回、顕著になりました。公共の場で流れれる映像に字幕がなかったり、講演など手話通訳者がいるなかつたりするのは、今も珍しくないが、耳に障害がない人は気付かない」。

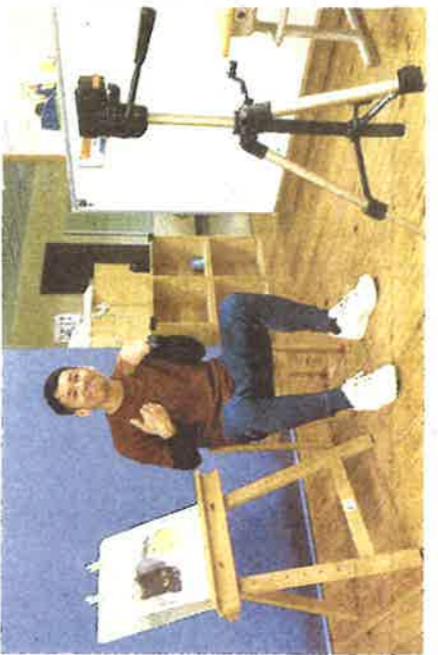
最近はマスクの関係で筆談が増えたが、時間を要するのに

フルストレーナーを抱く人が多いと感じるのは、持ちが『聴覚障害者は面倒くさい』という印象につながつてしまわないでしょうか」と危ぶむ。

中、マスクを外せない状態が続くが求められそうだ。先天性の聴覚障害がある東京都江戸川区の会社員川口彩雄さん(35)は「筆談でも、スマートフォンに文章を打ち込むのでも、身ぶり手ぶりでもいい。慌てず、自然に対応してもらえるうれしいです」と書む。

一方、病院の受診や入院にも不審も多い。自治体などに依頼して医療機関に派遣してもらう手話通訳者が、感染リスクにさらされるからだ。金百本(うあ)あ連盟(東京都新宿区)などは3月、このリスクをなくすためテレビ電話などを用いた「遠隔手話通訳」のシステムを厚生労働省に要望した。「遠隔通訳が広がれば、ろう者たちが生きやすくなるといつてもつながる」と期待する関係者もいる。

休校で登校できない児童向けに、手話で絵本を読む動画を撮影する明曉学園の教諭



西宮に住む昌子がこの春、横浜に単身赴任した。大学の4年間、一人暮らしを経験しているが、50歳を過ぎて、ましてや奥さんまかせの生活をしてきた息子は何かと不自由をしていると想う。メールを送信しても読んだのか否かで数日間返信など一度もなかつた。既読となり、1行だけの返信が唐突にきたった1行の返信が今まで以上に身近に感じられて、ちょっとうれしい。安心できる。さて今夜は何を伝えようか。

宇治市・75歳・主婦

使う環境が一気に滅り、孤立感を覚える子どもが増えてしまふ。聞こえない子の割合は、聞こえる親から生まれることされ、家庭内ではその子どもの会話以外、手話を使わないことが一般的に多い。

休学中の家庭内での手話環境を増やすため、同学園では3月上旬から児童・生徒向けに「手話動画」の配信を開始した。

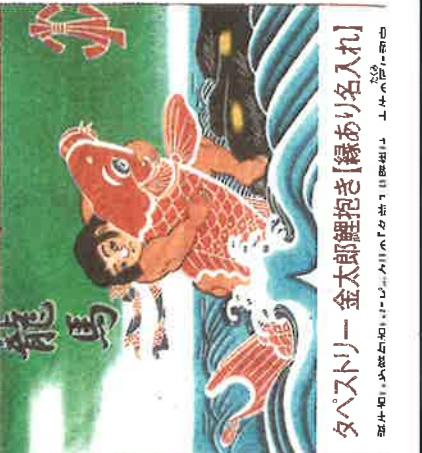
幼少部には絵本の読み聞かせや折り紙、小学部、中学部には自宅で撮影した劇や、感染予防の方法を伝える寸劇などを配信し、その一部をホームページで公開している。

「パソコンの前で集中できる時間が増えた親には、「一緒に見て画を見たり、手話を学んだりしてほしい」と呼び掛けます。

「ラーニングカード」を購入して取り出します。同じフレームに複数枚を組み合わせて、子供たちの世界を知る機会にしてほしい」と呼び掛ける。



豪華 鮭肉五種詰め合わせ 鮭はりはり鍋



タペストリー 金太郎鯉抱き【縁あり名入れ】



佐野の「おひる」

リキド入り家庭用

リキド入り家庭用